

## 主張

# 子供のために教師の使命と働き方改革

檜原靖宏



全日本中学校長会は昭和二十五年五月十八日に発足し、その三年後の昭和二十八年に機関誌「中学校」が創刊され、今号が通巻八〇〇号であり、この記念すべき巻頭に私が書かせていただくことを恐縮しており、記念号にふさわしくない拙文を御容赦いただきたい。

忘れられない光景がある。それは新採一年目、家庭訪問をして、保護者との話が終わる次の家庭に行こうとした時に生徒のお婆さんから「先生様ですか。」と呼び止められた。

そして「私は勉強をしていないので孫に教えることもできません。どうか孫を一人前にしてやってください。先生様をお願いします。」と話された。私は「先生様」と言われたことに戸惑いながら「分かりました。精一杯頑張ります。」と言ひ、車を動かしミラーを見ると私の車に向かって手を合わせて拜んでおられた。教師としての自覚もあまりなかった私にとって、教師という仕事の尊さや使命感を教えられた時であり、三五年経った今でも忘れられない。かつて多くの教師は「子供のため」と時間をあまり気にすることなく、学校で仕事をしただ。土曜午前は授業、午後は部活動をし、日曜・祝日も定期テスト前以外はほとんど部活動を行い、夜は家出した生徒を探したこともあった。時間を費やして仕事をすることは教師として当然であり、それが「子供のため」であると信じていた。そして同窓会に呼んでもらっ



て生徒に会い、中学生の時に心配した生徒の成長を喜び、教職の素晴らしさを実感していた。平成二十年頃から長時間勤務による問題点が言われだし、行事の厳選・効率化・定時退勤日など多忙化対策が叫ばれるようになり、平成二十八年度に教員勤務実態調査速報値が公表されてからは働き方改革に関する様々な施策が加速度的に進められている。

平成三十一年一月に出された中央教育審議会答申には今までの教師の努力で成果をあげてきたことが述べられ、そして『子供のためであればどんな長時間勤務も良しとするという働き方は教師という職の崇高な使命感から生まれるものであるが、その中で教師が疲弊していくのであれば、それは子供のためにはならないものである。』と働き方改革の重要性が述べられている。私は令和元年度に全日中副会長を仰せつかり、全国の校長先生方と情報交換をする機会を得ることができた。様々な学校課題がある中で、どの校長先生も共通して働き方改革が喫緊の課題であり、その実施が難しいことを話されていた。

私は働き方改革に反対しているわけではなく、教師が心身共に元気であることが子供の元気に直結すると強く思っている。しかし、働き方改革の名の下、真に必要な時間も減らすのならば本末転倒であり、そうせざるを得ないならば厳しい財政状況でも将来の日本を背負う「子供のため」に教員定数を増やしてほしいと思う。良い授業をするための教材研究、共感的人間関係づくりのための会話などはもちろんであるが、学校行事、生徒会活動、給食、清掃、部活動などにもそれぞれの教育的意義がある。時間がかかることもあるが「子供のため」に教師が主となって行うべき大切な時間であると考える。教師は「子供のため」にある崇高な職業であり、教師であることに誇りをもって勤務してほしいと願っている。

(全日中副会長・前佐賀県小城市立小城中学校)